「東アジアの伝統社会と王権」と題した本研究は、いままで学習院大学東洋文化研究所で継続的に行われてきた朝鮮を主題としたプロジェクトの成果を発展的に継承しつつ、「王権」をキーワードとし、中国・朝鮮半島、そして日本列島をも視野にいれた東アジア世界において、対外関係と国内的要因がどのように権力集中を規定してきたかを指摘し、「王権」をふくめた「伝統的社会」を解明することを目的に1992年度に発足した。メンバーは、小倉芳彦、斉藤孝、坂本多加雄、原島春雄、深津行徳、武田幸男、遠山美都男、中尾美知子、福士慈念、宮田節子の10名である。2年間にわたってほぼ毎月研究会を開き活発な議論が行われたが、ここにその成果の一部として、とくに朝鮮半島に流入したさまざまな文化要素に関する論考をあつめ、調査研究報告として刊行する。大方の叱正を得られれば幸いである。

1999年3月

「東アジアの伝統社会と王権」
代表研究員　小　倉　芳　彦